

博士學位請求論文審査報告書

氏名：ダオ・トリン・チン・ニャン〔愛知学院大学大学院文学研究科研究員〕

学位の種類：博士（文学）

論文の題目：藕益智旭の天台教学の研究

一. 論文内容の特色と要旨

〔1〕論文の特色

インドで興起した仏教は、紀元前1世紀頃に中国に伝えられた。中国に伝えられた仏教諸経論は、インドにおける経論の歴史的成立順序や学派の流れには関係なく、順序不同に伝えられるままに訳出された。中国の仏教者達は、漢訳された大・小乗の膨大な経典を前にして、仏教本来の立場から仏教をどう理解し、体系化するかという課題を背負うことになったのである。そのためにインド仏教にはみられない中国仏教独自の「教相判釈」が成立した。すなわち、諸種の大・小乗経典を釈尊一代の教説として、その説法の様式、あるいは浅深次第などの価値基準によって順序づけ、釈尊の真実の教えが説かれた経典を択一した。これが教相判釈の起こりであり、やがて学派や宗派を生む契機となったのである。

5世紀から6世紀の南北朝時代に流行した「南三北七」（中国の南地の三師と北地の七師）と総称される多数の教相判釈が成立した。

その中でも、天台智顛（538－597）が大成した「五時八教」の教相判釈が最も体系化されたものである。「五時」は、(1)華嚴時、(2)鹿苑（阿含）時、(3)方等時、(4)般若時、(5)法華涅槃時である。「八教」とは、釈尊が人々を教え導く形式、説法の形式や方法を判釈した「化儀の四教」をいい、(1)頓教、(2)漸教、(3)秘密教、(4)不定教をいう。さらに「化法の四教」は、釈尊が人々の素質や能力や性質に応じて教え導いた教理内容を判釈したもので、(1)藏教、(2)通教、(3)別教、(4)円教をいう。

本論文は、正に天台の「教相判釈」に関係するもので、明代末の藕益智旭（1599－1655）を問題にしたものである。智旭の天台関係の著書として『教観綱宗』1巻・『教観綱宗釈義』1巻・『法華経会議』16巻・『法華玄義節要』2巻・『妙法蓮華経綸貫』1巻・『大乘止観法門釈要』4巻の六種がある。これらの中で、天台の教相判釈に関する著書として『教観綱宗』と『教観綱宗釈義』がある。

智旭以前の天台の教相判釈に関する著書として、天台智顛の『法華玄義』『大本四教義』『維摩経玄疏』などがあり、六祖の荊溪湛然（711－782）の『法華玄義釈籤』、宋代の高麗諦観（？－971）の『天台四教儀』などがある。諦観の『天台四教儀』は、唐末の混乱期に天台教学の典籍が散逸したため、呉越王銭弘俶は、建隆元年（960）高麗に使いを遣わせて典籍を求め、天台教学復興に尽力した。天台の教観を究め、国王の知遇を得ていた諦観は、諸論疏を携持して天台山へ向かった。自からも天台学の入門書『天台四教儀』を著わした。かつてこの『天台四教儀』は、関

口真大氏によって廃止論が叫ばれたが、今も天台を学ぶ基礎として重視されている。

本論文は、天台の教判に関して、天台智顛と高麗諦観と藕益智旭の三者の教学を比較対照しながら、智旭の教説は、天台智顛の教義に適合しているか否かを確認し、智旭の新説をも究明しながら論が進められている。三者を徹底的に比較検討することは、従来行われていないので、学会に一石を投じる重要な研究成果となるものである。

本論文の総ページ数は、536ページ（39字×30行）であり、400字詰め原稿用紙に換算すれば、1,567ページに相当する大著である。

〔2〕本論文内容の要旨

本論文は、序論・本論・附編・結論・注・参考文献から構成されている。

本論の第一章の「智旭と天台教学」では、智旭が天台学系の諸師との出会いと天台学を学んだ契機について究明されている。また、天台教学に関する智旭の著書について、さらに、智旭の主著である『教観綱宗』の標題と分科を示し、著述した意図について究明されている。

第二章の「智旭の天台教相判釈」を究明するに当たって、第一節では、「五時の通・別の論述方法」として、智顛が説く別の五時・通の五時、諦観が説く別の五時・通の五時、智旭が説く通の五時・別の五時それぞれが究明されている。

第二節の「化儀四教についての智顛・諦観・智旭の解釈」では、天台教判の化儀の四教について三者の説を比較するため、智顛は『法華玄義』により、諦観は『天台四教儀』により、智旭は『教観綱宗』を用い、三者の比較を通して、智旭の真意を明らかにしている。

第三節の「化法四教の解釈」では、化法の四教の本来の教義を解明し、三蔵教の生滅四諦・思議生滅十二因縁・事六度、通教の無生四諦・思議不生滅十二因縁・理六度、別教の無量四諦・不思議生滅十二因縁・不思議六度十度、円教の無作四諦・不思議不生滅十二因縁・称性六度十度について究明している。また、化法四教の二諦・三諦について、智顛と智旭とを比較対照して論究している。

第三章は「天台観法についての智旭の解釈」を究明するのに、第一節の「化儀四教からみる観法：化儀四教と三種止観」として、智顛と智旭の三種止観がそれぞれ明らかにされている。

第二節は「化法四教からみる観法」として、まず化法四教の空仮中の三観、三蔵教の析空観・通教の体空観・別教の次第三観・円教の一心三観それぞれが解明されている。化法四教の十乗観法では、まず、智顛の十乗観法が明らかにされ、智顛と智旭の三蔵教・通教・別教・円教それぞれの十乗観法が比較検討して究明されている。

第三節の「化法四教の六即」では、三蔵教・通教・別教・円教それぞれの六即が明らかにされている。

附編として、「智旭『教観綱宗』における転・接・同・会・借の五説について」を論考するのに、五説の定義、五説と通別の五時、五説と化儀四教、五説と化法四教をそれぞれの立場から説き明かされている。

以上の目次構成によって、中国の明代末に活躍した藕益智旭の天台教学が、果して

天台智顛の教学に相応しているかが究明された。

申請者が智顛と諦観と智旭を比較検討しながら、煩雑で複雑な教相判釈の教学の世界に分け入り、一貫した方法論によって、一本の道筋を着実に歩み、大著を執筆した点は高く評価されるべきものである。

二. 審査結果の要旨

本論文は、文献学的研究である。論を進めるに当って、根拠となる経典や論書を正確に引用して、書き下し文を作成し、的確に把握・解説している。学術論文としての形態は、全体的に厳守され論が進められている。文献学的研究という方法論を用いて、終始一貫して論が進められ、当初の目的が達成されていることを高く評価したい。

第一章の「智旭と天台教学」では、第一節において、「智旭と天台教学との出会い」について論じている。智旭は幽溪伝燈の学風を継承し、仏教を修学する上で、天台教観の重要性を認識し、智旭をして、「台教存せば、すなわち仏法存す。台教亡べば、すなわち仏法亡ぶ」とまで言わしめている、という知見を提示した。

第二節の「天台教学に関する智旭の諸著述」では、智旭は天台教学によって、仏教全体を統合する意図をもって著述した、という新説を提示している。

第三節の「『教観綱宗』について」では、智旭がこの書を著述した意図・理由、執筆の経過について詳細に究明している。

第二章では、「智旭の天台教相判釈」を論究している。第一節の「五時の通・別の論述方法」では、「別の五時」と「通の五時」の相違を明らかにしている。「別の五時」は、華嚴時・阿含時・方等時・般若時・法華涅槃時のそれぞれの教理と機根に差別があることをいう。「通の五時」は、教理と機根が共通していることをいう。智旭が、『教観綱宗』を著した本来の意図は何処にあるのかを究明するため、天台智顛・高麗諦観・智旭それぞれの教説を比較対照している。智顛は、別の五時と通の五時を明確に分けて説いていることを論証している。しかし、諦観は、通の五時を説いていない。智旭は、智顛と同様に別の五時と通の五時を説いていることを明らかにし、とくに通の五時こそが天台教判の正統な学説であることを明らかにした。さらに、湛然とそれ以降の天台教学が、別の五時を説く『法華玄義』第一巻に依存するのに対して、智顛も智旭もともに『法華玄義』第十巻の通・別五時説によって教判を説いていることを明らかにし、新知見を提示したことは、とくに評価すべき研究成果である。

第二節の「化儀四教についての智顛・諦観・智旭の見解」の「化儀四教」は、頓教・漸教・秘密教・不定教で、釈尊が人々を教え導く説法の形式であり、薬の調合に例えられる。この化儀の四教に関する智顛・諦観・智旭それぞれの解釈の違いを明らかにし、とくに『教観綱宗』の化儀の四教の真義を究明し、頓教の相・漸教の相・秘密呪・不定益は通の五時に繋がることを明らかにし、通の五時によって、天台教学における釈尊一代の教化の本意を説いた『法華経』と、他の諸経との一体一貫性の関係を明らかにし、新知見を提示している。

第三節は「化法四教の解釈」である。化法四教は、釈尊一代の中で人々の機根に応じて人々を教化教導する教理内容を、蔵・通・別・円教という四つの段階に分け、五時及び化儀四教の中において用いられた法門を、その教理内容の浅深広狭に従って、

分類整理したものである。智旭の化法の四教を明らかにするため、智顛の『法華玄義』『維摩經玄疏』『摩訶止観』『大本四教義』と『教観綱宗』を比較対照して究明している。先ず、「三蔵教」の名義について、智顛と智旭について究明し、両者の生滅四諦・思議十二因縁（三世・二世・一念一世十二因縁）・事六度について具体的に論究している。「通教」の名義について、智顛と智旭について究明し、両者の無生四諦・思議無生無滅の十二因縁・無生六度・理六度について具体的に究明している。

「別教」の名義について、智顛・諦観と智旭の三者について究明し、三者の無量四諦・不思議生滅の十二因縁・不思議六度・十度について具体的に究明している。「円教」の名義について、智顛と智旭について究明し、両者の無作四諦・不思議不生滅十二因縁・称性六度・十度について解明している。智顛と智旭の「化法四教の二諦・三諦」義を詳細に比較検討している。この化法四教を157頁にわたって詳細に究明し、智旭の教説は、智顛の教学を根拠として説かれていることを証明し、新知見を提示したことを評価するものである。

第三章では、「天台の観法についての智旭の解釈」について論じている。智旭は、教と観との関係について、『教観綱宗釈義』に、「観は教に非ざれば正しからず。教は観に非ざれば伝わらず。教ありて観なきは則ち罔し。」といい、教とともに観法の重要性を強調している。第一節の「化儀四教からみる観法：化儀四教と三種止観」では、智旭は、化儀四教と三種止観について、何れも法華円教の立場から説示したことを明らかにした。漸次観の次第相生は、別の五時に属し、不定観の味味得入・毒発得入は通の五時であるとして、智旭は智顛の教観双依の立場から説示されていることを明かにし、新知見を提示したことを評価したい。

第二節の「化法四教からみる観法」では、三蔵教の折空観・通教の体空観・別教の次第三観・円教の一心三観を、智顛の『摩訶止観』と智旭の『教観綱宗』とを対照して究明している。両者はともに、円教において性修の二徳と三因仏性を配して、理・智・行を論じ、円融不二の行法を説示していることを明らかにした。また、化儀四教の十乗観法として、智顛の『法華玄義』『摩訶止観』『大本四教義』『四念処』『維摩經玄疏』『三観義』と明曠録『天台八教大意』と、智旭の『教観綱宗』を対照表によって究明している。さらに、蔵・通・別・円教それぞれの立場から、十乗観法の一々である（1）観不思議境・（2）起慈悲心・（3）巧安止観・（4）破法遍・（5）識通塞・（6）道品調適・（7）対治助開・（8）知次位・（9）能安忍・（10）無法愛を、智顛の上述の著述と智旭の『教観綱宗』とを対照表によって説示している。

智旭は、智顛の『摩訶止観』の意趣に基づいて、『法華経』における一仏乗の円融思想に基づいて十乗観法を体系づけたことを明らかにした。とくに、智旭は、大白牛車の譬喩を用いて円教の観法を明示し、『法華経』の円融相即の円理と円教大乘の観法とを結ぶ有機的關係を明らかにし、種々の新知見を提示したことを評価したい。

第三節の「化法四教の六即」では、天台の行位を問題にし、蔵・通・別・円教それぞれの立場から、理即・名字即・観行即・相似即・分証即・究竟即のそれぞれを智顛の教学と智旭の教説を比較して究明する。智旭は、智顛の円教の十界互具の立場から、化法四教の修証果位が論じられていこと明らかにし、智旭は智顛の教学を根拠にして、天台法華の円融相即の為実施権・開権顕実において、施権・開権としての蔵・通・別・

円教の前三教それぞれの六即を説示していることを明らかにし、新知見を提示している。

附編の「智旭『教観綱宗』における転・接・同・会・借の五説について」では、智旭の権威ある先学の研究者である張聖巖は、『天台心鑰：教観綱宗貫註』において、附の五説を掲載せず、また論究しない理由についても一切言及していない。智旭は、智顛の教学を根拠として、転入・接入・同入・会入・借入を説示し、転入・同入・会入の三説は、別の五時と、化儀四教の頓教部・漸教部と、化法四教それぞれの蔵・通・別・円教と関連することを明らかにした。接入・借入は、通の五時と、化儀四教の秘密教・不定益と、化法四教の通・別・円教の三教に関連することも明らかにした。智旭は、『教観綱宗』において、終始一貫して、通・別の五時を同等に重視していることをも明らかにした。接入・借入の二説は、被接義に直接関連するとして、五説それぞれの「入」は、『法華経』における「仏知見」「一仏乗」に入ることをいい、通・別の五時は、全て『法華経』に帰着することを明らかにし、転入・接入・同入・会入・借入の五説の重要性を見だし、新知見を提示したことを高く評価するものである。

以上において、各章・各節のそれぞれごとに審査したが、総括してその審査結果を簡条書きにして明記しておくことにしたい。

(1) 本論文は、「智旭教学の核心は、天台教学ではない。」という趣旨を主張した張聖巖の『明末中国仏教の研究』の先行研究に対して異議を申し立てたものである。智旭の研究遍歴を明らかにした上で、最晩年に著した『教観綱宗』撰述の意図は、天台の正統の教観論を評価して、明末終末期の疲弊した仏教界を天台教学によって統括するとともに再興しようとしたと結論付けている。本論文に一貫しているこの学説は、十全に評価されて然るべきである。

(2) 智旭の「諦観の『天台四教儀』の流行が、天台教学を味くした。」とする趣旨の批判の真偽を見分けるために、本論文は、『教観綱宗』の説を逐次、天台智顛の原典に遡って検証し、智旭が智顛の教学の原点に回帰しようとしていた経緯を、熱意を込めてこれでもかとはばかりに検証している。その結果、『教観綱宗』における「通の五時」説や、「六即」「十乗観法」の四教各説の意義が証明された。本論文によって、天台教観の網格がより鮮明になったことは高く評価されてよいと考える。

(3) 智旭は、どこまでも天台智顛の教観双依の天台教学を根拠として、『教観綱宗』を著したことを明らかにしている。とくに、智旭は、智顛の「通の五時」と「別の五時」の真実義を発見し、天台教学における通・別の五時を等しく重視したことを明らかにした。また、化法四教それぞれの「十乗観法」と「六即」を究明し、「転入・接入・同入・会入・借入」の五説を通して、五時八教の教判と密接な関係にあることを明らかにし、種々の新知見を提示したことは高く評価されて然るべきである。

(4) 本論文は、何れも学会において未解明の問題を解明し、種々の新知見を提示し、実に優れた研究成果であるということが出来る。

(5) 候補者はベトナムからの留学僧であるが、完成度の高い論文であることを評価したい。研究の方法論や論文の推敲に関しては、一貫した研究姿勢が貫かれている。努力に努力を重ねて優れた研究成果をあげたことを高く評価するものである。

三. 今後の研究課題

本論文において未解明の問題も残されている。箇条書きにして、今後、研究すべき課題を指摘しておきたい。

(1) 本論文は、天台教学を大成した天台智顛と高麗諦観と藕益智旭の三者の教相を比較研究したものである。しかし、天台智顛の教観論は、明曠(章安灌頂)の『天台八教大意』1巻、荊溪湛然(711-782)には、天台三大部の注釈書である『法華文句記』30巻・『法華玄義釈籤』20巻・『摩訶止観輔行伝弘決』40巻などがあり、天台教学は、湛然教学を根拠として発展していくものであり、実に重要であるが、本論文では一切問題にされていない。また、諦観の『天台四教儀』1巻の三大注である宋の神智從義(1042-1091)の『天台四教儀集解』3巻・南宋の古雲元粹の『四教儀備積』2巻・元の玉岡蒙潤(1275-1342)の『四教儀集注』3巻を経て、智旭の時代へと変遷をみせるのであるから、時系列で時代と共に変化していく天台教学の研究動向を解明する必要があるであろう。この新たな視点を取り入れることによって、智旭の天台教学の意義は一層明らかになるはずである。例えば、南宋の古雲元粹の『四教儀備積』が初出となる「五時偈」を、本論文に何の断わりもなく引用していることなど、こういう配慮があればより厳密な論旨になったであろう。そうすると、智旭の『天台四教儀』批判は、『天台四教儀』そのものへの批判であったというよりも、むしろ後世の末注者たちの研究態度に対する批判であったと解されるのではないであろうか。

(2) 本論文は、基本的に天台智顛と高麗諦観と藕益智旭の三者の教相を比較対照して、智旭の正当性を智顛の教学によって傍証するという手法が用いられている。例えば、語句が同じであるから、両者の教学は同じであると安易に結論が導かれている場合がある。歴史的変遷を経ていて、その背景は全く異なっているかもしれない、ということが考慮されなければならない。

(3) 上述したように、高麗諦観の『天台四教儀』に対して、とくに批判的立場で対応しており、客観性を欠いている場合がある。歴史的な天台教学の変遷の責任を全て諦観に押しつけることはできない。中国の天台教学史上、諦観の果たした役割は甚大であることも考慮されなければならない。

(4) 智旭の天台教学の教相を問題にしているが、ほとんど『教観綱宗』『教観綱集釈義』のみに限られていて、P. 19に記載されている天台関係の典籍はほとんど用いられていない、今後の研究課題としてもらいたい。

以上のように、残された研究課題も多くあるが、本論文自体は、未解明の種々の問題を解明し、随所で新知見を提示し、学会に一石を投じたことは、十分評価に値するものとする。

四. 口述試験および語学試験の結果

〔1〕口述試験

予備審査委員会が、平成30年11月7日(水)午後1時に開催された。主査・副査3名が出席し、副査の外部審査委員は文書による回答がなされ、慎重に審議がなされた。審議の結果、本審査に入ることで了承された。

口述試験は、主査・副査四名の審査員が参加して、平成31年1月23日（水）午後2時～3時30分にわたって質疑応答が行われた。

ダオ・トリン・チン・ニャン候補者は、各審査委員の質疑に対して的確に回答した。とくに、専門領域に関する煩雑な質疑についても、日頃の研究成果をもとにして、的確で明快な自説を展開し、各審査委員を十分に納得させるに足りる理論的根拠を明示した。

審査の結果、合格と判定された。

〔2〕語学試験

ダオ・トリン・チン・ニャン候補者は、平成24年5月23日に本学大学院の博士候補者試験に合格している。

五. 結 論

以上の理由ならびに審査経過に鑑み、ダオ・トリン・チン・ニャン候補者の本論文が、本学の学位規則第3条第2項に照らし、博士（文学）の学位を授与するに値すると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

本学位請求論文のインターネット上での公開を認める。

平成31年1月23日

主 査 愛知学院大学教授 引 田 弘 道 (印)

副 査 愛知学院大学教授 佐 藤 悦 成 (印)

副 査 愛知学院大学客員教授 伊 藤 秀 憲 (印)

副 査 駒澤大学総長 池 田 魯 参 (印)